

「平和と共生——イスラームと仏教の対話」レポート

マレーシア創価学会

※本稿は、4月にクアラルンプールで開催された会議の模様を主催団体のひとつであるマレーシア創価学会がまとめたレポートの翻訳です。「」内は訳注です。

今回の宗教間対話の集いは「法華経——平和と共生のメッセージ」展（会場は、この会議と同じマレーシア総合文化センター）の関連行事であり、同展は東南アジアでは初の開催である。

この対話の目的は、仏教とイスラームの観点から平

和と共生への理解を深め促進させることである。両者の観点は、それぞれ法華経ならびにイスラームの聖典であるクルアーン、ハディース（預言者ムハンマドの言行録）の中の譬喩や説話に基づいている。

歓迎あいさつ・基調講演

はじめに、マレーシア創価学会の許錫輝（コー・シャフエ）理事長が歓迎のあいさつを述べた。その中で理事長は、今回の宗教間対話には、マレーシア創価学会、



左からラムジ博士、司会のファリダ・ノール博士、ボー博士。会議の様子は、マレー語紙「ハリアン・メトロ」、中国語紙「南洋商報」「東方日報」「光明日報」のほかインターネットニュースでも報道された

東洋哲学研究所、マラヤ大学文明間対話センター、マレーシア首相府国家統一・統合局など多数の団体が協力していることに感謝するとともに、法華経展の来場者も、「2月15日の」開催からこの日までに4万人近くになると報告した「5月18日の終了日までに7万人を超えた」。理事長は、宗教間対話は異教徒間の理解と尊敬を促進するために不可欠のものであり、この日の会議はイスラームと仏教の各聖典に説かれた譬喩や説話を学ぶ機会を与えてくれると述べた。また、この日のコメンテーターとマラヤ大学文明間対話センター、なかなかなく、この集いを主唱した同センターの前所長であるライハナ・アブドゥーラ博士に対し感謝の意を表した。最後に理事長は、今後とも、調和と共生のために協力して活動していきたいと語り、今回の宗教間対話と法華経展が人々にとって大きな利益になることを期待していると述べた。

続いて、主賓のジョセフ・クルップ首相府大臣が基調講演を行った「本誌5頁から別掲」。はじめに大臣は、2014年3月8日、クアラルンプールから中国へ向

かっていたマレーシア航空370便が失踪した事件に触れ、それを受けて多くの異なる宗教の人々が共に集い、乗客・乗務員の安全を祈願した事実を強調した。さらに、3月8日を「国民の祈りの日」に制定するよう内閣に提案したことを紹介した。次に大臣は、多宗教国家であるマレーシアでの宗教間対話の必要性を訴え、「あらゆる宗教の信徒の間で相互理解と尊敬が示されることが不可欠だ」と述べた。その際、宗教間対話は、コミュニケーション全体を強くすることを目的とすべきであり、偏狭な自己利益のために行われてはならないと付け加えた。最後に大臣は、参加者を祝福し、楽しく有意義な一日にと願って、あいさつを終えた。

宗教間対話のセッション

宗教間対話のセッションでは、参加者紹介の後、司会のファリダ・ノール博士（マラヤ大学文明間対話センター所長）が「今回の対話はイスラームと仏教の經典にある譬え話を基本に行われる」と述べ、その理由として、それらが理解しやすく、覚えやすいことを挙げた。そ

の際、譬えは散文や韻文で書かれた短く簡単な物語であり、道徳や宗教的な教訓を説いていると説明した。

「人の明かりを灯すには、

まず自分の明かりを灯しなさい」

最初の発表者であるモハマド・イスマ・ラムジ博士（マラヤ大学文明間対話センター研究員）は、ブッダが平和のメッセージを説き、人々を燃え盛る家屋から救出したという興味深い法華經の譬え「三車火宅の譬え」に言及し、これは「あなたがたが火獄の穴の辺りにいたのを、かれ「神」がそこから救い出されたのである」（クルアーン…3、イムラーン家章103／日本ムスリム協会訳）という、クルアーンの教説に類似していると述べた。また、同博士は、クルアーンは、預言者ムハンマドへの啓示であり、彼が生きていた間に記録され文書化されたものであるのに対し、ハディースはクルアーンのメッセージの実践的な解釈であるとされ、ムハンマドの言葉や行動などを、彼が生きていた間に記録したもののや、死後50年の間に伝達されたものが収録されていると説明した。そして、ムスリムは、クルアーンやハ

デイスに背くような解釈や意見は認めないことを強調した。そして、他宗教と同様、イスラームも平和と調和を促進する宗教であり、このことはイスラーム信徒たちの『Peace upon you』（あなたに平和が訪れますように）という意味のあいさつにも反映されていると語った。また、博士は、イスラームの神は、慈悲深き神とされ、ハデイスには、「神の慈愛は母親の子に対する慈愛よりもっと深い」（サヒーフ・アル・ブハーリー5999）と記されており、預言者ムハンマドもまた、神が「万有への慈悲」として遣わしたとされている（クルアーン21…預言者章107）と述べた。また、信徒たちはムスリムとも呼ばれ、ピースメーカー（平和をもたらす人）とも呼ばれていると語り、このようにイスラームには平和に向かわせていく指導性が間違いなくあると訴えた。

ラムジ博士は、さらに、イスラームにおける平和とは、単に戦争が無いことではなく、「アッラーへの畏怖以外、あらゆるもののへの恐怖心が無くなる」ことであると述べ、平和への三原則として、第一に「人間は神聖な存

在である」ということ、第二に「人間は暴力的な性質をもつゆえに、人類は平和に生きられない」ということ、第三に「人間は知的にも感情面でも弱い者であるゆえに、神こそが人間を平和へ導く存在である」ことを挙げた。

さらに、イスラームには平和について、「平和の構築」と「平和の維持」という二つの筋道があるとし、「平和を構築するには、まず自らが平和を自己の中に確立することから始めなければならない。人の明かりに火を灯してあげるには、まず自身の明かりに火を灯さなければできないように」と語った。加えて、イスラームは人間のニーズも平等に重視していると述べ、そのニーズには身体的なもの（食欲）、知的なもの（真実の追求）、霊的なもの（宗教）が含まれているとした。また、「イスラームは、人は孤独であるよりも他者と関わり合うほうがよいとして、社会のつきあいを奨励している。だから、スパイ行為や、陰で人を中傷するといった、社会的交際を壊す行為をしないよう教えている」と解説した。

それに関して、次のように紹介した。――ハディースの中には、預言者の教友〔サハーバ〕がムハンマドの妻に、ムハンマドの普段の言行について尋ねたという話がある。「その後、彼らは、すでに神に赦されているムハンマドよりも、もっと厳しい信仰を自分たちはする必要があるとして」そのうちの一人は「私は眠りにつかず、一晩中祈っていよう」と言い、またある者は「私は性行為をせず、結婚しないであろう」と主張した。また別の者は「私は食べることもしないであろう」と言った。これに対し、ムハンマドは「私は断食を行い、その後で食する。夜は祈りを捧げてから眠り、私は結婚もしている」と言つて、「私の慣行（スンナ）に従わない者は、私の仲間ではないのだ」（サヒーフ・アブル・ハリーリー4776）と叱責したと記されている。

社会的責任――「同じ船に乗る旅人」の説話

続いて博士は「平和の維持」について、その責任は二種類に分けられるとし、こう説明した。一つは、タクワ（Tagwa）すなわち「アッラーへの畏怖」に基づいた個人の責任。もう一つは、社会的責任であり、これ

については「同じ船に乗る旅人たち」の説話に描かれている。この物語の中で、旅人たちには、船に一人ずつ席が与えられている。しかし、一人の旅人が、自分の席は自分のものだと言い、自分の席の下を掘り始めてしまう。誰かがその旅人を止めようとしなにかぎり、その船は沈んでしまうという話である。社会的責任を示す別の概念として、良心の呵責がある。イスラームでは、神に対する罪は神によって赦されるとするが、人に対して犯した罪は、その被害者から赦しを得なければ罪は償われないとされている。

ラムジ博士は加えて、イスラームにおける異文化や他宗教の尊重は、預言者がメッカからメディナまで移動する際に同行していたガイドがユダヤ教徒であったことからうかがえると解説した。また、預言者は「メディナ憲章」という最初の平和条約を締結した「ムスリム間の原則、ムスリムと多神教徒およびユダヤ教徒の間の安全保障協定などを定めた」。そして、エジプト人はムスリムたちを自分たちの土地に招いたこと、アラブの商人たちがスリランカに通商をしに行き、スリ



マレーシア法華経展の会場。法華経をはじめとする仏教經典の写本（レプリカ）などを興味深げに観覧する人々

ランカで平和に暮らしたことなどに言及した。

最後に、ラムジ博士は、近年の問題は、イスラームがムスリム以外の人たちに対して排他的になってしまったことに起因しており、これは、アッラー、クルアーン、イスラームのメッセージは、すべて全人類を対象にしているというイスラームの精神に反していると強調した。

司会のファリダ・ノール博士は、イスラームは平和の宗教であり、平和を建設するためには個人のレベルと社会のレベルで平和が築かれなければならないと述べ、次の発表者であるクリストファー・ボイ・チョイメン（梅松明）博士を紹介した。

「対話は世界宗教の全創始者の伝統である」

ボイ博士は、はじめに、今日の世界は多くの対立、不信、孤立によって特徴づけられており、だからこそ宗教間対話はなくてはならないものであると強く語った。そして、過去100年におけるコミュニケーション技術の発展は、情報を瞬時かつ容易に世界中へ伝達する

ことを可能にしたが、こうした技術の発展によって、人々が本当にコミュニケーションできるようになったり、真の意味での対話ができるようになったのかは疑問である」と述べた。

また、多くの戦争が宗教の名のもとに行われ、今日においても続けられていることに言及し、原点に戻ること、つまり、これらの宗教の根底にある哲学や宗教の創始者たちの思想・人生観を再分析する必要性を強調した。さらに、博士は、全ての宗教の創始者が、平和を愛し、生命を愛し、人類を愛していたと確信していると述べ、もし全創始者たちが一堂に会する機会があったならば、彼らはきっと善き友になると信じてと語った。

博士は、この信条は創価学会の戸田城聖第二代会長が力を込めて訴えたものと述べ、戸田会長の「宗教や哲学の創始者たちが一堂に会して『会議』を開けば、話は早いのだ」という言葉を紹介した。また、仏教は対話をきわめて重視していると述べ、対話は仏教の伝統であり、全ての世界宗教の創始者の伝統であって、

イエス・キリストも預言者ムハンマドも人々と語り合うことを大切にしていたと語った。加えて、仏教の教えが説かれた経典にしても、ブッダが、権力争いや社会的混乱の続くインドを旅していた際に出会った、さまざまな問題を抱えた人々との語らいをもとにした『対話集』とも言えると述べた。

ボイ博士によれば「誠実な対話は、真の友情への第一歩である」。それは、相手のことを知りたいという真摯な願望の表れであり、そのためには二つの要素、すなわち「自分と相手の命の尊さと限らない可能性を尊重すること」「全ての生命の多様性を尊重すること」が基本となると述べた。

また博士は、法華経の第八章「五百弟子受記品」の「貧人繫珠の譬え（衣裏珠の譬え）」を引用した。この譬え話は次のような内容である。ある裕福な者が、貧しい友人を見て不憫に思い、友人が酒に酔っている間に彼の衣服の裏に宝珠を縫い付けたが、急ぎの用があり、そのまま立ち去った。しばらくして酔いから覚めた友人は、宝珠の存在には気づかず、路上で放浪する生活

を、裕福な友人に再会するまで何年も続けた。彼のみすばらしい姿を見てショックを受けた裕福な友人は、衣服の裏を見るよう促し、貧しい友人は、これまでずっと自分の衣服の裏に縫い付けてあった宝珠を見つけて大歓喜したという物語である。博士は、この物語が示す教えは、全ての生命に仏界という最高の境涯が具わっていることであると説明し、宗教・信条・文化・性別に関わらず、全ての人が最高の生命境涯を具えている平等に尊貴な存在だという信念が仏教の基本であると訴えた。

さらにボー博士は、仏教の共生という概念を説明するものとして法華経の第五章「葉草喩品」の「三草二木の譬え」を挙げた。この譬えの中で、三種の葉草と二種の樹木は、それぞれが異なる姿、彩り、大きさ、構造をもっており、雨が降ると、それぞれの生長の必要に応じて水を吸収する。この水とは、宇宙の生命力からの滋養であり、また宇宙の無量の生命を育む仏の教えを表している。13世紀の仏教指導者・日蓮もまた「桜梅桃李」の譬喩を用いており、仏の努力の目的は、

多様な生命がそれぞれの可能性を最大限に開花できるようにすることであると述べた。博士は「それぞれの草木が最大限に生長した姿は、それぞれのユニークな美しさをもっている。同じように、われわれ人間も、自分を型にはめる必要はない」と語った。個人の多様性を尊重することこそが、三草二木の譬えの最も重要な教えなのである。

「SGIの平和研究所に、ムスリムの所長を任命」

博士はさらに、池田大作会長が指導する創価学会インタナショナルの活動は、そのような対話に貢献していると述べ、池田会長が2000年にマレーシアを訪問した折に、二人の人間の深い友情を表すマレーシアのことわざ「友情は指と爪のように切り離せない」を引用したことに言及した。さらに、「創価学会インタナショナルの運動は、信頼の拡大、友情の拡大、そして幸福の拡大のための活動である」との池田会長の言葉も紹介し、池田会長が対話の重要性を訴えていること、会長自身が世界中で、さまざまな背景をもつ人々と数多くの対話を展開してきたことを紹介し、次のように

述べた。「イスラームの背景をもつ人物としては、インドネシアのアブドゥルラフマン・ワヒド元大統領や、イラン出身のマジッド・テヘラニアン教授（ハワイ大学）などと深い英知の対話を重ねてきた。さらに、師匠・戸田城聖の平和構想を実現するために、1996年に戸田記念国際平和研究所を建設し、研究所の所長として、ムスリムでありSGIメンバーではないテヘラニアン教授を任命したのである。この任命は、池田会長の信念をよく表している。すなわち、ムスリムと仏教徒が共有しているものは両者を分かつものよりもはるかに強力であるという信念であり、善意をもつ人間同士は協力できるし、互いの違いによって、より豊かになれるのだから、多様性を避けてはならないとの信念である」

ボイ博士は、池田会長とテヘラニアン博士との対談集は、これまで読んだ対話録の中で最も素晴らしいもののひとつであり、内容が意義深く啓発されるものであるとともに、二人の美しい友情に心を打たれたと語った。そして、対話集の末尾に収められたテヘラニア

ン博士の詩——異なる宗教をもつ二人の間の友情と絆を表現した詩を紹介して発表を終えた。訳注

質疑応答

暴力紛争——政治家が宗教を利用した結果

はじめに、マラヤ大学に学ぶ日本人の学生が「スリランカもマレーシアと同様、多民族社会だが、なぜマレーシアのように平和ではないのか」と質問した。これに対し、スリランカ出身であるラムジ博士が意見を述べた。博士は、現在のスリランカの政治的不安は宗教そのものが起因ではないとし、「植民地化以前には、スリランカ人の間での宗教対立による暴力紛争は記録されていない。植民地時代に入ると、多くの地域で反植民地主義の思想が広がり、その過程で『スリランカは仏教の島であり、ほかのイデオロギー・宗教は受け入れない』というイデオロギーが強まった。これは結果的に、反植民地運動に勝利をもたらす効果があったが、国家が独立した後でも、政治家の中には自己の利益のために、このイデオロギーを利用し続けた者がい

た「その結果、紛争が続いた」と述べた。

続いて、マラヤ大学のゾバイダ博士が「どうすれば、一人ひとりの中に平和を築けるのか」と質問した。これに対してラムジ博士は「人はその性質を平和なものに変えられる。それには勇気が必要だ」と述べるとともに、イスラームでは、平和への最善の道は祈りであり、他には瞑想などの方法があると説明した。また、ボイ博士も仏教的視点から質問に答え、「平和を達成するには、一人ひとりが自身を見つめ、確固たる自己を確立しなければならぬ。宗教の重要な役割は、各人が自身の生命の実相を洞察し、自身のかけがえない可能性を引き出せるようにすることであり、それによって社会をより善くすることである。また、これを成し遂げた一人の人間は、同じ道に続くよう他者を励まし、周りに影響を与えることができる」と強調した。その際、一人の人間の可能性を象徴する人物として、アメリカの公民権運動で知られるローザ・パークスさんを挙げ、次のように述べた。――彼女は自分も白人と同じ権利があることを信じて立ち上がり、他の人たちも

後に続くよう促したのである。このような勇気は実に重要なものであり、それは若者にこう教える。「どんな生命も全て尊貴なのである。あなたが自分自身の素晴らしさに気がついた時、あなたは他者の素晴らしさにも気がつくことができるのだ」と。

ここで、司会者のフアリダ・ノール博士が、会場の後方に飾ってあった中国人画家によるムスリムの女性の絵を紹介しながら、「女性も男性もどうしたら平和に貢献できるか」とパネリストたちに質問した。ボイ博士は答えとして「女性は何世紀にもわたり、戦争や暴力によって手ひどく痛めつけられ、往々にして声も上げられず、沈黙のうちに苦しみ続けてきた。しかも、男性の場合と違って、その苦しみはニュースにもほとんど取り上げられてこなかった。こうした女性の苦しみは、平和のための大いなる情熱と推進力を生み出す可能性をもっている」と語った。また博士は、SGIは平和に対する女性の役割を常に重要視してきたとし、その役割は今後さらに大きくなるだろうと語った。一方、ラムジ博士は、隣人に対する女性の役割の実例を

挙げ、「イスラームでは、ムスリムの隣人とも非ムスリムの隣人とも、思いやりのある関係をつくるよう奨励している。彼らは各自の宗教にしたがって、それぞれ権利をもっているからだ」と話した。

最後に、マレーシア人のヨン氏が質問した。「もしイスラームの創始者（預言者ムハンマド）と仏教の創始者（ブッダ）が話し合いをしたら、彼らの究極のメッセージはどういうものになると思うか」と。パネリストたちが答える前に、聴衆の一人であったアブドゥラ氏が意見を述べ、「神が人間を創り給うたのであり、両者とも神のメッセージを伝え給うた方だと信じている」と語った。一方、ボイ博士は「両者は、今日の世界が直面している問題について話し合い、その解決方法を摸索するだろう」と答えた。ラムジ博士もその意見に同意し「もし本当に両者が話し合ったならば、必ずや協力し合って、世界のためにできるかぎりのことをされることだろう」と述べた。

結論

最後に、司会のファリダ・ノール博士は、今回のような「イスラームと仏教の対話」が今後とも続いていくことを念願。次のように述べた。

——イスラームと仏教の両方の発表者がそれぞれの宗教の「平和」の概念を説明したが、イスラームでは、人間は考えるために「アル・アクル (Al-Aql)」すなわち「知性」が与えられているとする。本日、参加した聴衆は、平和を語る知性を持ち、同時に生活の中で平和を実践している人たちである。平和は世界中の全ての人々にとって、こよなく貴重なものである。私たちが進むべき方向は、異宗教の間で、また同じ宗教の中で、よりオープンで誠実な対話を促進することである。善意をもつ者同士が話し合い、彼ら自身が、イスラームと仏教の普遍的な価値観を全ての人に届ける「平和のメッセンジャー」であることを自覚しなければならぬ。

テヘラニアン博士の詩「友情の贈りもの」は次の通りである。

「初めて会った二人／なれど 時間と空間を超え／
 我らを分かつ言語も超え／はやくも 議論できる友と
 なった／我ら二人は／束縛なき絆を／国家なき同盟を
 ／精神の王国で形成したのだ／心の言葉は 口先の言
 葉よりも／甘美にして 我らを引き裂かない／そが
 もたらすは／超越への 希求のなかで／それぞれの／
 時間と 空間と／言語と 苦難の／固定と脆弱を超え
 て／二人を一体となす 欲び」(対談集『二十一世紀
 への選択』潮出版社、二〇〇〇年、四〇二・三頁)
 博士によれば、一九九二年、池田SGI会長と初め
 て会った翌日に詠んだ詩である。